地獄の輸送船

福岡市城南区　　尾藤　清一

昭和１９年に新設された「陸軍特別幹部候補生」（旧制中学３年終了程度の学力）に志願、第１期生として同年４月に兵庫県加古川市の「陸軍航空通信学校加古川教育隊」に陸軍一等兵の階級で入隊、１９歳（最年少は１６歳）。主として無線通信の訓練を受け、翌２０年２月、台湾に派遣のため門司の兵舎に集結、約１週間滞在。この間船が撃沈された際、船から海に飛びこんで避難する訓練を受け乗船。「生駒山丸」といい、当時の噂では３０００ｔ、１ｔ１人の割当てで乗船とのことで、３０００人もの多数が乗船したことになる。なお一説によると、畳１枚に１０人から１２人の割当てとも。「ギューギュー詰め」どころではない。

門司から台湾の基隆までは、遅い船でも２、３日で到着するだろうが、我々はなんと２０日間を要した。理由は明々白々、門司から東シナ海を台湾に向け直行、南下すれば米軍潜水艦に撃沈されることは確実、潜水艦攻撃を回避するためまず玄界灘を北上、朝鮮半島西岸を陸地沿いに更に北上、今でも「麗水」（韓国）の地名を記憶している。旧満州（現在、中国東北地方）の大連付近まで北上し、中国の山東半島から中国東岸を南下、福建省沖から基隆に到着、現在では到底考えられぬ行程である。

乗船の際判明したことは、各部隊ごとに服装が区々であったことである。我々は冬服に冬の外套に短剣、雑嚢一つの軽装。満州から派遣された部隊は、南方に行くためとのことで夏服で完全軍装、寒さに震える者もいた。救命胴衣なるものは、長さ約４０㎝、直径約８㎝の竹の筒を約１０個継ぎ合わせた粗末な物。こんな物で浮くのだろうかと不安を感じた。船は石炭の輸送に使用していたもので、床には粉炭が多く残存しており、その上に筵を敷いた粗末な部屋、寝具などあろうはずがない。飯盒を所持していないので食事には予期せぬ苦労をした。飯は「握り」にすれば食器は不用だが、汁には閉口した。汁は直径約２０㎝、長さ約３０㎝の桶に、数人分が割当て。食器が無いのでその数人が適当なところに車座に座り、まず一人が桶を抱えて一口、二口吸い、隣の者に回す。同様に順次「回し飲み」である。煮付物には別に不自由は感じなかった。更に困ったのは水である。洗顔用の水などあろうはずがないので歯磨きもできなかった。真水の湯茶がないので海水の茶であったが、飲まれたものではない。中にはその海水茶を飲む者も出始めた。しかし食物での争いは見られず、なんとか２０日間維持できた。

畳１枚に約１０人が乗船したのだから、夜、足を延ばして寝られるはずもなく、更に船が撃沈された際、船上等甲板にいれば、早急に海に飛びこまれる等の理由で、夜間は半数が強制的に船上に出され、夜を過ごさねばならなかった。

沿岸沿いの航行とはいえ当然船体が揺れるため、船に酔う者が続出、幸い自分は酔わなかった。さらに日時が経過するにつれ、前記の海水茶や船での不衛生、不潔、船酔い等で嘔吐、下痢患者が続出。トイレといっても甲板の外側に枠組みをした簡単な物で、青空の下、大海の波

しぶきを眼下に覗いて大、小を達する。乗船人員に比してその数も不足、たまりかねて甲板に大を達する者、嘔吐する者、さらに打ち上げるしぶきや雨等で、上から下からの不純物、異物が甲板上のあちこちに漂流、掃除をする者もいない。全く想像に絶する異常な光景であった。

我々は「日本は必勝」と確信していたが、この惨状を毎日見ているうちに、これが世界に誇示したかつての帝国陸軍かと思い、更に「このような軍隊が果して米軍に勝つだろうか」と初めて不安、疑惑を抱いた。

かかる劣悪な環境のため、死者が出始めた。３０００人の中には僧侶もいて、甲板上での簡易な葬儀に読経、我々も参列、なんとか葬儀の形式を呈した。噂では、遺体を毛布で包み、弾丸を「錘」にして海中に沈めるとのことで「水葬」と称していた。２０日間で１０人近くの死者が出たと記憶している。戦争の非情を悟ったのもこの頃であった。

輸送船団の周囲を海防艦が巡回、護衛していたが、夜間時折「ドーン」という轟音を聞くことがあった。それは、船にも爆雷を積載しており、米潜水艦が接近した際には、爆雷を発射するとのことで、その音であることが分かった。

日時の経過に伴い、予期せぬ天敵が出現、それは虱である。最多の発生場所はふんどしで、次に下着のシャツ。発生に気づいた当初はあちこちで虱退治が見られたが徐々に多発、無数に達したといっても過言ではない。こうなれば指で潰す程度では焼石に水で誰もが虱退治を断念、かゆさや不快感に黙して耐えざるを得なかった。ふんどし等に隊列をなして密着、それは壮観ともいえた。一人１００匹としても３０００人で３０万匹、２０万匹とみても虱の強大王国が形成されていたわけである。

後日談だが、上陸後兵舎では全員一斉に虱退治を実施、方法は直径約１ｍの平釜で下着類を煮沸、１週間か１０日続いた。下着類の所持も２、３枚程度で、捨てることもできずこうして保存着用したものである。

このような地獄の輸送船団も撃沈されることなく無事基隆に到着。まず目に入ったものは、岸壁近くに日本の輸送船が船体を半分海上に突出、傾斜して沈没していた。岸壁には参謀肩章を着した将校が２名、我々を迎えていた姿が印象的で今でも忘れない。いかなる心境で我々を迎えていたのであろうか。

昭和２１年初め、我々は台湾の花蓮港に集結、復員を待機。花蓮港からも日本への邦人引揚が認可、大分の実家より家族家屋も無事との報に接したため、早急に復員する必要もなく、それで我々若い力を邦人引揚げ作業に挺身。最終の邦人と共に旧海軍の海防艦で花蓮港から鹿児島に上陸。約３日で到着したものと思う。一般引揚邦人との同乗のため女性がおり子供も。おむつ等の洗濯物が艦上にはためいた。虱も湧かない、食器も完備、台湾に向う時の死の緊張感は無い。行きと帰りでは天国と地獄の相違。戦争が終結した安堵感で平和をつくづく実感したものである。年齢２１歳３カ月、昭和２１年４月下旬のことである。